

勝三郎連獅子

長唄

全詞章

河竹其水（黙阿弥）

作詞

二代目杵屋勝三郎

作曲

文久元年（一八六二）五月

〔本調子〕 それ牡丹は百花の王にして、獅子は百獣の長とかや

桃李にまさる牡丹花の、今を盛りに咲き満ちて、虎豹に劣らぬ連獅子の、戯れ遊ぶ石の橋
これぞ文殊のおはします、その名も高き清涼山

峰を仰げば千丈の、みなぎる瀧は雲より落ち、谷を望めば千尋の底

流れに響く松の風、見渡す橋は夕陽の、雨後に映ずる虹に似て、虚空を渡るがごとくなり

かかる險阻の山頭より、強臆ためす親獅子の、恵みも深き谷間へ、蹴落す子獅子は転ころころ
落つると見えしが身を翻し、爪を蹴たてて駈登るを、又突き落し突き落す、猛き心の荒獅子も

〔二上り〕 牡丹の花に舞ひあそぶ、胡蝶に心やはらぎて、花に顕れ葉に隠れ

追ひつ追はれつ余念なく、風に散り行く花びらの、ひらりひらひら、翼を慕ひ、共に狂ふぞ
面白き

〔本調子〕 折から笙笛琴箏篳の、妙なる調べ、舞ひの袖

獅子団乱旋の舞楽のみぎん、獅子団乱旋の舞楽のみぎん、牡丹の花ぶさ香ひ満ちみち

大中利巾の獅子頭、打てや囃せや牡丹芳、牡丹芳

黄金の薬あらはれて、花に戯れ枝に臥しまろび

実にも上なき獅子王の勢ひ、靡かぬ草木もなき時なれや

万歳千秋と舞ひ納め、万歳千秋と舞ひをさめ、獅子の座にこそなほりけれ